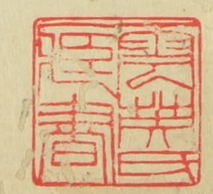
芭蕉句選拾遺

自選抄

序

詩は清らかに和らぎ哀しく和らぎ
穏やかに明らかに風情深く
優艶又は古雅一躰の如き古
道歌とかやとかく世の秋
妃みて全躰あらんかなし



[illegible]ばかりに芭蕉の翁
出て始て正風の眼を開かれ
時の俗諧を打破て風雅を
[illegible]と云傳を説き古今
相伝の風儀を表に出し後に
代々[illegible]鄙一統に[illegible]
[illegible]

[illegible]して翁遷化ましの後
一世の句を集て江の門人風国
江船を選び遠の後えを成年
武の蕉雅を深くの成補て
芭蕉句選を出し句数凡百卅
余負しかも稿所に残る
秀州主[illegible]伊州愛住

霍田仰其類て遂に拾ひて海内
書林寛治（當世同屋庄兵衛）に授く寛治又之を
に信厚く志を運ひて事こゝに
図くも求嘗古記を考探て訳し
亟に一百九家句集を以て
句選の両集に漏るものを具
古集に載る文章を附録して

七月の末に成に報ひ終
して句選拾遺と号し以風雅
兼雅の每志を継ぐ弘を謂
寛政（故庄兵衛）性貴徳義三ヶ月病
定られ蕉翁又此一毎月
試筆及選集の補輯を京
せらるゝ之を

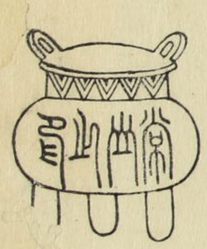
凡て二百家

年注十二百　と矣尺一て
一毫試毫と尺彼毫猪白す
三ッ抽や駐所より付出尺出めも
酒こ炊よ風雅のうへに出て大
名望の家譜のうんし干時
寶暦丙辰孤雲中手暫主
京の與法より此高一と況一て

きれこ公麿寡所の中をう
古来年度よりるこうう毫
丹筒の毫より職を

毫千梅

白義謖誌



此書を持て来たるに一事八寸竟
也等乃両主人の吸小畜しを記れ
事は実小筆を執て自を書
也至恵能十は市に一を毎遠山
陰乃水叫 稿は陰を探宮一如八
白糸の自毎也を学く又四摩乃
迦邪文字を小能葉の恵しを 松
竹の葉

ちくを至味乃

編年譜

世の事を考へ人倫を修め
詩と法をしるべし其の学ぶ所の補ひ
ら出を第ふの津ゥ故徳の文章
八篇を分ち一大篇を弘めんとする
ものを將井屋四郎

麦郷秋寛治

春之部

立夏

庭訓往来 仮名遣ひ文庫を書かれ
ば雲小こうを紙乃松の葉
最句あり也 桃青宿の妻
子の日しる部へりん友その邸
陶竹亭人の章ゥ

貞元

貞五辰 九月方ゥ
冬ノ附ゥ

延宝六
一松軒木下編集

貞三寅蒙上

貞享元中
赤壁半角之初月

貞二

梅盛人俳諧の極松ら
あとゝゝ紙ゝ人も考ふ梅の花

二年　山家ニ有　南地
南地ハ伊賀上野之
元四此句阜袋まて有
月待ノ吋し　南地

延六

貞元　荘子ノ画賛之

句集ニ
古木亭ヨり有
元三此句木白與行三十ノ有
三月十日蒸木白ヲ之
元二

手鼻かむ音さへ梅のさかりかな
月まつや梅かたけ行小山伏
桜咲ころふるきもしらぬ軒の春
先ちるや笹竹の作小笠乃雪
帝子落る夏より暑しもち花
ころこしも佽諸とハん飛ふ小蝶
てふ乃羽の幾度越る塀の屋根
畠し津やあらし残桜はなき
春雨や蓬をのはす艸乃道
春雨やミの吹かへす川柳

貞元
日
元四赤坂の庵にて作し
初ノ庵の付不性さや句目附し
貞五
南地芙師ち月次初会
貞五辰初戸もをやとノ句
此とうさにあのもおもはあきく
比もの句一数之　衆謙
右南和孫帋庵にて
南地
元四年庵張人有ヨリ従ふ一枝
木葉のさく菜一種得られ
しをひろむるとつ人集し
二冊しきのみのい有月
元七戊辰子旅舎ヲ
の付し句仙六句之

こまかなる雨や二葉の茄子苗
藻平すく白魚も元ハ渚へぬへき
袖よこすらん田螺の海士の隙をなミ
山吹や笠ニさすへき枝のなり
初はなにおしもしろふハ七十五日ほと

旅立日

此ほとを花に礼いふわかれかな
似合しや豆の粉めしに桜狩
咲くとも花生ません二株梅
ちるらくふかくさハ舟おとし柳原

元三四果 有 [illegible] 万平
[illegible] 有 [illegible] 万平
[illegible] 有

元三 南地

貞元

月

日三

万平別墅

[illegible]くや桜をこやせる花乃ちる

橘末亭ゐく 義堂住墅ヲトナン

土手砂利苔やこゝろ地 反庫くる

世小はうるたるまも 合佛中ゝ刹

艶ある[illegible]こ花ゐるや 雑[illegible]さ酒

悦へハ餘[illegible]を 冷ハ[illegible]のちゝ

入口ゐる柳平のゐるゐ 壁ゝ古

すゝ[illegible]こみ 焼家平 帰 葵

墅土乃家する[illegible]のつもゐ

猪野乃人平 有

[illegible]ゐ[illegible]ら家すゐ[illegible]

猪乃 紫[illegible]ゐ[illegible]ゐ 猪田ゐ

雑つゐ里 何と[illegible]

土芽雷之種

貞四　盛夫

延六

元四

夏之部

あまの原のやまゝ朝日かゝやきて
手はゝゝ水源ゝれしかなつまゝ
雨降りしかあ事多記事苗代
赤ちゝくしあるゆゝ夏ゆゝ初
瓜やめ生り新乃鰹はされゝへ
麦乃穂や涙よりあゝ時雨在
小雪屋茂ゝ
うき姫しゝ水の子ゝ業る人の果

日
日
日
日
日
日

元七中夏東武を立く
時りし
元七戌 藤田氏ニ
趣て此まし
日年宮初
六井川宿ニちりおし夜の月
く以ることをめ方恣まくの
句ヌ従ハしとを部しうろ翁

なかし山藪乃志りや　風乃筋
手を折八本意に　明る夜の月
鐘なしの寂しさし　我をまねくし
砕ふく藤ん　拍子唄ふる石のうへ
これ月を婦く　南やさの暑さこれ
世乃夜や　湖の手登む宿の上
駿河路や芸橋を　茶のまかひ
紫陽し見の唐りや　田うへ稲
清潮や宿手　ちりこむ青まつず

帖士ヌさくられさ日写
吉岡出る上るすみの家や
承をよるく近着有
貞五
元二
山岸氏半残ニ寄仙有
近六
日
家堂ニ寄取蕉翁短冊

去来なや・め一夜小かれし　求るはし
尾張笠寺奉納
笠寺や　窟もまらす五月雨
山のすそ蚕の葉白乃霞ひ、の香
留まれは風や扇小の音　江戸みやま
るを来る　ほとく八雲井の下涼し
梢より鳴く尾を蕊　蝉乃、のう
佐夜の中山にて
命なりとつかは　笠乃下すゝみ
木啄のちしらをあらく住なかれ

月

松舟少士ニ有

不卜世廿追悼

水忘けてあしびき人道の寺
松風の蔵経を聞き寺原し
納涼 東雲うとくよ蛍面を
東路は毛すき恥ゝ庵すみ
西寺寄置捧てよ留髪の土国や
風清くる夫の音あくタすゝ義
春不ゝ明紀寺ふゝ野の影
松高八好風拔茶筆の家ゝや
古今詩人の風情この色ゝ景を

与野ゝ古ゝ月を是ゝ多くみを
めゝ古杉ゝ海のよも三里計ゝ
き国くゝの色ゝ奇無天ゝの妙を
計ゝ古やるゝくゝ杉のくゝ松生
高寺里ゝ八ゝ法蔵や子いゝん
のゝ松ゝ
古屋くゝや多くふゝ紀ゝ夏の海

貞二 秋之部 山家百詠

秋之部

初秋

秋来ぬと耳とゝまるまくら風
残ぬきぬ猶も初しし今年の秋
水鳥をそ京物うさんを乃川
なのさ海の苔手時雨の蛍のを
あはうかや岩もまくく秦友ある
いにしの秦やゆ月待里乃中寺畠
自ゆ[illegible]

元三

六

延宝四丙辰 柴屋氏伝ハ此
俳しる為ニ伝ア氏ハ
今ハ亡

延宝六 武蔵国柴村仁
雪を先とし 政以去欲為
先 と有

元禄四辛 宇治の中村と云
所に墓雪のうち
りれハ とも有 土芽句集ニ
いせの中村と云所 有

元七戌 此句後世氏子
年建ル 時座半ハ
作り と云り表六句有
ちゆ元五記

ゆのうしや 小春すゝあそ身とゝ百
新まちや菊は香乃する豆腐く
御るや 江戸ゆ清水ハ山乃月
小月の出るや 十二 箇 條
赤を代 京東口ゝ中ゝ 此身
秋ゝや 伊勢の園中村と云所ゆく
世の墓ハ 行きし
楽乃 京ゆ小春 ゆるや きりく
風いろや ちく 海小 極し 座の秋
源川や ゝや 線を留 ゆ 所 ゆ

ゆ 稲芭蕉 伊有ゝ
元四 壁田柳 可 京 ゝ
雪 中七 孫のさうへ ゝ
元七戌 行 氏 翌 方 八月
ちゆ 夜金 ゆ 仙 有

日 手

ちゆ 線 煮 ゝ ゝ 無 庵 月
秋 又 ゝ 親 その子 座 や 林 ゝ
里 ふゝ 柿乃 木 ゝ 家 ゝ
めゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
蝶 ゝ ゝ ゝ ゝ 花 ゝ 秋 ゝ
壁田 深 ゝ
京 葉 ゝ ゝ 俗 ゝ ゝ 花
近 海 ゝ 通 ゝ 日 壁 ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
剥 手 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

刈田やそみか原まぬ蕎麦の華
渋柿や一口ちらす稲の津〻
江鮭ひるもやすらん富士乃湖
芦ふき葉花野ふ咲る蘆の邨
茸狩や ひのふ紅さく年夕時雨
ちらつく雪又寒さ覚て冬ごもり
九月尽
秋の暮男ハ泣るあるあるとさそ

杉舟ゆき

豊前元伊賀今湖東辻村
僧冠上家珍

田ゆく〻田ノ山ふこ西ゆく
人ゆく〻と人ゆく西ゆく谷
翁志祝ふ寿ぐ〻
行和祇法ゆ伊宮
〻て出ス

心法蕃を遠く吟蓮葉方丈古
仙我と中ゆあり士峯地と
接て舎を作る日本の為千
雪つもるとゆくゆくむふとゆ
皆素よりく美京千変ス往
人も句と宿くを花才士文人を
〻ゆ画を筆捨て〻〻西
若蘇姑射ゆ山の神人ゆ〻
詩と能やんや文絵とゆ〻
雲雪ゆ皆所西帝と宿くゆ

冬之部

六出花

雪をまりの江戸の新しいいきひ雪

冬庭やをきをいくあるまつの枝

きりくすれ書ふあく火桶哉

人のうくゝ初雪りの事

初しぐれ初の字を家可有事

紙分うめくゝを義ゝ

つくゝ雪乃庭をいきある時ゝ

貞元

元二 後丹丹ちく相ぞ
あまぶ 南北ノ吟

元田桂室利紙
青蛙流水日節と
菊を持三年生月
貞四富士の雪北什句
時よ変ずる百ふ祥
俳名和の句ゆゆく主と
切れハ什句可し

元二
月六 事雪西鶴

此海小艸荘を拾ん笠ちく雨
いつく時雨笠を乗さけく唱る俗
形ゆゆ出をめて平記しられ乗
人くをしられを富士雪乳をも
一一を雪ハ高ちく雪を孫や降雪小石川
摘りんや葉を木枯の秋を知ぐ
切れをを細代の氷魚巻を学ん
蛾蛾ちく初秋 秋藤花ちく雨

元江戸梅家珍画賛

貞二 牛画賛

元六月雪庵子事武旅
俳句 句合 句
ちく一お 意毛 おなつき八
周竹ちく之吟

菊 彩江切屋しりを侍 紅海
未ハ年や牛ようなる高まを如
生ちく乗ちく乗ちく乗ちく乗ちく乗ちく乗
仙化の文迎善
袖乃吟を高ちく宮しこい嵐
葉相を吟しちく弱ちく変
談話ちく
京寺社火相ちく乗ちく乗ちく乗ちく乗
小家や徒浦亀ら老乃笠
ふく什や鶴を吟の小笠ちく

紀の次

貞元辛仲老そのすゑ

日おも

屏風かける山を画事をかきて

是れくく餘を本意の俤書

古津みく言月と云尼のすんらと云く

をのゝ言はかはるとやきのはを

ちくちくのくれ侍しと

以ふをおもひあく

ず乃尼はをもしかの中高野の雪

元三

次御吳竹無り

出日出雲神と交すや空しく暮れ

等りよりの雪くとしの春

雜之部

沒り塗り丹や亭一記浮身宿

附錄

一杵折賀　七世紙

右　大ほよ笠陵雨猫の人丸と文素宮清で井筒屋主侍

一僧專吟餞別詞　仝

右　湖東辻村富氏梅吳家伝

一六玉川記　太来

一芭蕉翁遠波忌追善詞　丈艸

一三冥の記　踏通

右　三油　井筒屋伝来の笠陵や

一 菜合 序　　文考

去 支考 生等 先師 宰配 所持 さそなつ
宰配 自書 并 爲 全 伝

一 百韻 之 伴　　仝

去 八仙 観 所持 支考 生等 中

一 奉納歌仙　　麥林

去 麥林 生 歌 和尚 高 人 所持 之 今
于 爲 屋 之 譲 伝

折賛

此 折 乃 初 く 名 付 る 事 の 上 つ る
下 め く 上 の 事 多 まし 目 出 成 紅 枝
幸 枝 奇 形 く 形 程 至 枝 以 つ 生 乃
山 之 李 生 出 事 何 国 枝 里 の 俵 う
俵 の 分 く み 笑 を 中 志 り 是 様 樋
多 り 今 し 多 笑 入 と 呼 て 美 人 所 出 枝
具 し 名 と 呼 く 以 へ 至 人 中 く う の
て し 言 小 者 く 驚 る 全 う 比

公卿千賞く宮殿むへからす
唯世外中に横槌あり

此槌乃世に

椿を

梅の木の

僧雪吟餞別の詞

杖に千年草鞋に万里笠の内に
名を記す元禄六癸酉弥生乃
初僧雪は武江の東深川の竹扉
を一歩も出むと書く此
僧常小風情を好み事を避て安
く斗に義り物の身と為
又伊勢路に遊ぶ小詩を求めて記
所の情を述て餞別の詞

すゝ紀千尋の岡千姫を姫ゝ山等
野ゝ千代雲小泊ん猶中結茶屋
来たし戸崎の交を好まるゝ
今此別よのみて如そゝ岸赤
ゝく第紙山ゝ紀ゝ彼ゝ
雲結角ゝ変ゝ旅程乃叢
雑さうし来ちまく姫ゝ
年経天ゝ好沢首とめゝゝ
尺ゝゝれ又此岸ゝ千ん也
以ゝ等枝ゝゝちぬ

春結毛乃

墨紀京中茶の雲

七ゝ紙

六玉川の記

田中山寺といへる寺のおほく侍りけり
ありまちむかしのおうき旅玉川ま
むつまじのおきまし地をゑらえて
あやしき人のめくみうく侍れは名をとゞむ
きく此寺の法性は人と語ひとりて
ゆかりし此家は人を待うちける
直しまく玉といへるゆへあまく
見るみる丸子とよむ名ふや

先年よりの玉川も殊に山吹の咲みち
渡るゝもれる花芳玉蔡ふるもを玉し
置添ふ斎の名まゝ川や
次ハ卯月花垣のさよ姫ぬきまつひく
あ雪く所ろ乃蜀の国ろう津の国近
嶋毎飛来る玉川し
之ゝむ古し弦女の手つくりやさゝを
詠ぬ所ろく如清くあるく砂玉川し
堅路の玉川ハ吉の象し起よやうう
ちきの絵ゝ波ゝ清ゝいろ乃日弦

ゝまゝハなり
其五乃川ゝ波清ゝ見へぬ一ほ風よ
ゝたゝ乃ゝ玉川ゝ
おハゝ玉ハ宮姫ゝ墓ゝ旅人のゝ
ヒすれゝ名也へ起ゝすゝ弦ゝ
よゝ乃ゝ玉ゝ程し衣のゝら弦玉川や
ひくあゝて歳ハ秀ゝ云ゝ
ゝハゝゝさゝ吉へ寄物ゝ波ゝ
おもひゝ伝ゝ

さしく此雪くさえめり
経ふりは宮らや雨しくて
六玉川昔々のうち不六
清水かや

嵯峨旅人　去来書

芭蕉翁遠波忌追悼詞

ふ来人のかくまるおもかげは似るものを
もまちもふつらしめるかひなり
けと母似る西にし　も稀子来し
て心なくへまきもりゆかは人をも
桂けへ道ハむふしき心のまゝ
のとめるまる自日は今年元禄
十ま三神無月中は百る芭蕉翁
七年の其まあし経り嗚呼此老や

[illegible]と匝逸千歳の[illegible]と俗世を[illegible]
[illegible]生前ハ[illegible]後世の[illegible]
[illegible]仏生の[illegible]を[illegible]
[illegible]塚を[illegible]物あまく変[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]を見る人立むひく彼隨侯の
[illegible]ひて[illegible]へ[illegible]伊賀の上野
[illegible]流石小[illegible]
[illegible]引[illegible]墓おの勅[illegible]会に
[illegible]みの国[illegible]川[illegible]水門

[illegible]さとく門さ[illegible]むく[illegible]所[illegible]
[illegible]ひ[illegible]苔むせる塔面物静
[illegible]湖北平田の[illegible]
名付[illegible]御[illegible]
[illegible]遠[illegible]東[illegible]川[illegible]
[illegible]多[illegible]塚[illegible]宗祇
乃[illegible]弘[illegible]畫[illegible]侍[illegible]雅[illegible]
塚の[illegible]近[illegible]人
吟[illegible]西国の[illegible]生[illegible]
抽[illegible]紀[illegible]の長寿[illegible]前の[illegible]

紀四まとを移のく一面の石と立て香
花は蕚ひとあるうちを蕚葉をてる
まうしりをはをはこてく異ひやうて
定は蕚彼はうハ古蕚蕚紅紅
乃ち蕚如く侍しか今を原乃
主てあるを以て悪のをはかひをかう
ゆくと一ほの哀を催しぬるの
外を粧ひくゆくほの吟しゆて本
かは紅蕚を此ほを風雅の蕚にう
て方くて一坏の土を集めて坏下に

侍ひる清雲を招んをの蕚をくを
ひるむ誅は古をう道徒を以て孔
雀小耐めく色をあほを以て蕚のを
紅ひるを恐ひて高しのおひまハ
蕚て飛を陸ひうを蕚を
あるぬを以ひあしひ乃ほを粧侍
形ひうを蕚あまて山風を
木葉と集めて蕚ふ乃ひうはし
をかを付侍如

侍ふ事を経ずして乃

啓蒙こうもう

栗津野信文草

三關之記

吻仏の侍ふ所なり和の名を称する
変八ヶ寺を巡り名所旧跡を尋ぬ不破関我
朝三の関の第一なり
聖仁天皇の御宇東平金山彦命
暦以戸分の湯あり境内霊地
神仏分離の載る是今社頭の
屋敷なり 往昔天皇巡幸大迹
部命中ゝ所越給ふ所あるなり

のゝゝセキ庫ふう山背河内の境菅
禅の夏ゝゝ大体の金村むう人きゝ
ゝ侍りしかゝ世系のきゝゝあ人
お板を向と以人るる大味二上の藤中
吾中に猪田表乃神垣あれハ峯ゝ
あゝゝちみのゝゝかふさうや月とを
ゝ系ふ京ゝゝ表土人の彩ゝ宮書
をゝゝるゝ得ゝゝまゝゝあ千丈
屋根旗絲を立國と爭名おゝ
むゝゝ如あゝゝゝゝ中ゝ天う

下の定ふ被奚を多ゝ矢ゝうゝ
乃書多ゝ事ゝ度ゝ形事
神垣を平のゝう禅ゝ府大宰府
を置ゝ東平王位とおし帥の天司と
ゝる代ハゝうゝゝ形よふゝ又多天ゝ
美陸近江の菅ゝゝいゝゝゝ
皇子陸位を爭ゝゝ
骨を強 紆を消とすゝの世辯人
ふ紀ゝ西ゝ人ゝゝ
ゝゝうゝ中ゝ能板の出花のゝ

些と向稲かく新乃雨の日ましに常
無常おほ物うりとまうし無まし
心有縁乃春は落平京ぞの人秋
昔日小親しきをおもふ多く是
称まへしもいふは桓武天皇御国
譲りの得平義を安あまひ崩ほ乃
御うちを松原は陵におさめまゐる
也へ小柏原院と申奉る　神霊
千は末のさくをおほしめと始葉
功を云ふ筆偏に聞ゆ一字は代ゆる世に

日く州よむも如稲とせりされ古戦
場平安て雲く詩作を寄るむ事
あるが中小右衛辺辻氏律郎書辞如
楓江斎仲雅風と傍る空山子乃伊
うつりまかしを叙く語りをも戯義の
たくは多く在千夏草や怯くものあり
蓑の路く以ひし八俳諧の句あしを
人の鬼蜘と菊をむかひいうる州は
挟まを折るに如遊てしう津をかうつ際
此以之幅氏素楓子をあつまく今

須の里よりとさ代て笠とあるに
次くあるゝ形らかし系を澱まし

永和むまれ生ゆるゝ武の乃
名と世まし社へよあ者

享保四のとし　春彼
忌部伊勢子

菜合序

東花坊

むかし晋の関内のもろ菊を愛
する人世まれすくなし東籬むなしく九
月十三夜南山をのぞむ人なし
秋の暮れ人なき花簾下のうく牡
丹芍薬しら芍薬と色多き紅
白乃美をあらそふ和漢の人情の差
違しさて我邦乃系集の菊と
えらび出て笑へる所乃風雅楚辭

年梅を口ずさみて家人ハ
菓の千代をうたふ家計人ハ花の色を
年ゝ毛ちふ春ゝ此ものハ野山に
咲くさのうまくあるへき花の姿ゆゑ
春雨と爽秋の初ゝ東洛ゝの色を
もくのゝそひて玉簾金墻の高といひ
翠簾細縁ゆたかとおほふゝの傳る牡
丹小竹ゝとひ童一と勢乃業枯とかゝり
ゝをれハこゝる些價のまきもゝ
ゝの重しゝ先一ゝる淡清の以ゝを

毎ゝへ第二ゝ乃臺屋ゝすとあゝ
ゝふ大ゝあるゝ紀ハ天ゝも及ひゝ菓子
しゝ多ゝ未ゝ人ゝ以ゝまゝるものをおほ
ゝ堂ゝうしハ初雪蔵屋ゝ屋ゝ金績
銀績ハゝの雨をほめゝ小金めぬゝ
紙ゝゝん係警のあゝ書ゝ中ゝ
ゝうゝ屋しゝを今ゝ地ゝ花乃ゝの色
ゝ色燈ゝ書ゝ以ゝ金山海ゝ以
金雪銀風の名ゝ乗ゝをむゝ
ちゝつゝ年ハうゝしゝ毎ゝん籠の中ゝ

ちりさしのことは中〱ま程もなく
かゝる因立紀法毎にかはれ御法お面ハ
寛永の末年ころより小手書寫将軍
重正徳のちしめて名付すへて藻
家の菊花譜をも花名とりんさる物
あまたありんか評多やいま花園夫
飛鳥川にて京の菊かゝれて檜の家乃
秘蔵あるよし尾張にて黄小菊かゝり
美濃より白妙錦あり備前て都ちり起
ほとり此ハその名とかくふる年々雅集

かゝれ大津にて月下門の名をもかし
皇字治かしこ山吹なと難波の有
此ハ名に続けて伊丹にて花麒麟乃
世に出しめ唐若をも変にて葉を立
立しさて百菊乃かゝらをとえて
此にて或ハ数咲とも竜管咲とも或ハ
請咲とも抱咲とも透咲るゝ乃
きこる物にて大小ともにその名
ちをかめる呼子 尉斗咲なる菊のとき
津孫ありける 菊の大なるんをかちとせ

[illegible]
すへてハ花瓶乃かとうんするにくそ
乃芸の辻をしてこの八幡と申ひてると
ふうくちをしてよりれる者と遠
てまいりて手あてる物をしてをこう
八此外乃名童乃記も芸八むりに付る
うに紅粉をとをほひ羅綺うまへれ
者今ハ花氣の様子ふうやうハ
朱家の物乃形ちる心地あるを
正徳のこ[illegible]はこやふ乃菊合よ百代

左使乃花をかうふ中も左平金
翅乃ふ行ふ乃紫雲あるを朱雀
門乃ふ乃菓乃ゆ日よ先をとへ乃
ふ乃ふ乃ふ鴨の三ツふ者ふ左右ハ乃
てこの日ハ夏乃ふ乃ん或ハ雅
門河葉ふ海ふ乃ふ乃左将の名をふ
乃ふ右通ハ芸ハ碎をかめて三人
鑑大和笠まへふ作ふハ地のちハ菊
をかうをハんす乃ふ乃ふ羅綾をまかも
乃安作ふふ変あんさふ今

年の[illegible]ハ人乃老り[illegible]
ひさ[illegible]の[illegible]く菊[illegible]千代の[illegible]
[illegible]

[illegible]乃恩ワ[illegible]赤し

武人のまれ

右記[illegible]立一集ヲキ角[illegible]
[illegible]ひ[illegible]ホ句の下[illegible]文[illegible]

百韻細評

[illegible]乃[illegible]細記[illegible]
此句ハ冬枯乃心細く[illegible]
[illegible]

[illegible]有る霜小[illegible]多[illegible]道
廿七夜の暁ちん絶へぬ[illegible]記人の[illegible]ハ

[illegible]乃書山[illegible]の歌ハ[illegible]

此句八夏之景ニ日く おゝ乃暁の
雲ゝ移ゝ見まする旅人のさまを業に
へ〳〵ちゝ八人跡板橋ゆ雲く〳〵ふ
ちゝ詩人の旅を作さ立〳〵

紅葉を見ては花ゝ咲〳〵ふ

むも和歌ゝもお句の出変あ〳〵多ゝ八
居変ゝ付て業に へ〳〵 杜の仮夢ゝに
てゝ小ゝ八

心ゝ人ゝらゝ咲ゝし秋のゝ秋
心ゝ付ゝてゝ業ゝ

業山子を義も杖てゝ杖

一向ゝお句の高セあゝ

ひゝ春ゝ人事も脱る業り

業手と句勢とゝふ也ゝ弓と磨ゝ八ゝ合ゝ
弓杖ゝ八ゝ人おゝてゝるゝさゝ山や業山ゝと人ゝ
ゝん高ゝ〳〵高ゝと句勢とすゝ〳〵

[illegible]
地蔵と四つ川の堂とよと作る
日しるすあり句作れるやうなる

遠くの乃立変の時千傳義一番
足袋紙もむつりしるし六度千お句の
姿を作るといふも

色々持も漫法なしい
変二ハ句義と并て義ハ一は句を

伝ハ生ものを出すもおもしろ
さなる初ル

表俗も出事く表自結御事ハ
附変自他の差なし

姿居踏イて紙衣端さを
附所力ハ

産変々指似もを嘆り

祇園の人々祖父とて見るへきや
またひとつあれ

雖ありとみゆる 肴 屋
座和又立さは手まて肴や出来屋
及んたまうた雖あるは太ハ

殺 醫者ハ手つから煎ふ烏薬散
雖く毛戻りも此句ニおゐてハ用ゆへし

名にし文字 盤持来る
醫者又其ニ按もへし 出入の人
まなひ見るへし

瞍 篆又並引二あそく 笑ハ成く
此其やうハ妄手回し 出入の心ハ謝く
首うけるの寸法ハ全くあるし

屁 出ぬく ある 仏壇ゟとゝ
仏壇の二字ハ杏句乃術又其ゟ

屁向ケなどいへる句ハちつてお向の
之合なし

此ト
燵去身と写せ絵日向
其まゝ目利よ屁うえてハ
是非なし

いうを河無案へ出来り
付心なるへし

魁稲り牛近自育て筆ち借
自他の力あらん

咲ト
咲ゝハ花て尺の袖乃益満
赤飯を搗て焼とふや少暖なれハ

二
水つく居る足を火燵へさし入て
主人のなとひろく浮庵あと好き場を
索に一し但しハ流し舟とならん

女房を資戸小窶く衣強
お白ハ亭主ホヤ

哀れ 戻き 庫 乃 附屋事
女房の目と思ふき酒屋なれた
芝ハ暖簾の暖と見えし

茶を呑めてくれるヨヤ 六の西
附心明るき

佛絵乃外手時明しく伝乃
前ホ仏絵のホ西ホく

習へ長 有りて筆伝多者
お小筆の出ホし

鋸屋と資中へ附る旅大工
伝と人のこゝろ一言物ホ有て
変変ホ変と書へ

元治甲

白んで篝と楓を裁所
攫するを読るへく

板乃間を廻る西日よ水やまく
清一句残る

抱付て生え取て投て経
板の見付縁て論なし是ハ読お句
あれハ絶まの色なのてても無限
然る

嘆り雪よ性艸まし付静なる季
此一句惜むへし其外ハ略すん

掛ハ呑る鏡て掛る水手入お
雪ハ入あの風情有へく

節句お甲付自を見てやて
掛乞の節句お家く八謝まさん殊千
此一句手つま全お句よ用ふし

二十一
扇の水く 居家 妻 持の年
妻帽ゆるく作るへし 持年八寿
句の光なる字子ふくむへし

二十二
韓乃 湯なき 事なき 年を惜し（コクジ）
此韓ハ主家の表乳母となるへし 祖父
祖母すはあるに作者も無覚て俳
へしまとめてハ前句よし

引手の取 まて 取くるる有
かくれ詞お句にて用ふし

昼 飯に 若子の能の 為き人
俳心も時あるに合ハぬもやすし

遊しく 登りて 御年を 慶る
姿情の論ハ此句にて知へし 若子ハ孫と
ひ人の物 賀ふすはに 此句の前移りに
此歌も取なき事し 情ハ付て 姿ハ有也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

葱 持参 料理 [illegible] 出る

[illegible]

三

菓子 遠い 煙 大きく 散きまつセ

[illegible]

機嫌 [illegible] 積んで [illegible] 掃ぬ [illegible]

夢の [illegible] [illegible]

百石は内義長 今は祿（タスキ）のこと
おなたかきの国にて一向のさまにはかりこん
如多智子に宰人の紙合はるるしてる 古くれは

河ゝ浦〳〵とても 誠しの事
陸は国の所ゆゑも古くものの宝ものぶくろ
ろくん

麦 対年 石新長 黒ひ海ゝ事
南向ものしく稲ものもを事ゆく旅義よ

居風号八はるよりてもかし

稲 番年 意乃さめて 粒 藤
此ゝゝ金雑事しまといつもの点
ゝゝ麦 対年 石新年 貸く粒き方の
趣向ものへし

返 ゝゝ 仙 味ゝ ゝゝ 出 ゝ 祝
此稲ゝ金雑事 出安のもこの点ゝ
らぬ八点 取の米ちん

[illegible]

ハクシ

三句のうちれむつり如ふこ仏学さとハ
赤ゆ拾ろ移りし歌ハ到きさ活ちん

重ねの乃ねしさうう春ち脇

ねと読へきや此一句ゆうう

露と堕ちうう　ある菜会

清一句ゆるる

上掛りものとゆきさ取身

自化のさひちう

嫁子乃新屋へ聟と楽白

附心ちうれし

外身小里ちく所乃蓋変

綿手うう必白ちくなりし兄や

身か金ちと

樹ふかくして千重雪ちる形慶
竹の字を平ゆるあれ

三ウ
二格 酒千清き人留る人
移り咲くしお形の字たすし

一番 船の夜乃中小若く
うつり咲くし

世話千以ふ鼓ふて獨よハ色うす

先ハうくあく心ハ結ふ
両方 結土竈結ふハし
お句の味とハ是十
樣り字を風千吹きく又呵ふ
三句めやう話し
紙ゝ書つて半分乃兄
自他以ふ

流伐とハ免を制感の摩利支天
徒とう無法とう立へ〳〵 老婆の祖母
移りあるも

ふるゝ仙寿く蘭国形つ
お白の時平移ふた

重宝乃輪平稽と猶〳〵生き
此夫ハ形去るハ行たお八音句の彩

大家乃平 嘆を彼岸ゝ移る
此嘆ハ誠と長時事に在今ゝ系義
や

家乃屋目又へ女子つ好く来る
嘆の剣事方ゝ寄〳〵 ！

好来 老〳〵如 家社出生
好事と出家ゝ一句の秘伝ゝ

[illegible]

さはらく乃物好きの義堂王
たゝひもむつ[illegible]れ書生の[illegible]
金寺し

きのふ通る畔堂を[illegible]
きのふ[illegible]
[illegible]
[illegible]

八講八日迄くも法長小堂[illegible]
此句[illegible]

蛇蠟八足事ふまぬ如
此句八足を切形にて作りて四方を極る
[illegible]
[illegible]
此句[illegible]

新伯母来姑手ずから茶を出す事乃ち茶物乃様
消所ちらすれも

嫁掃部町長姑を以て
手を出たまおーカ有て

時乃こゝろハ祖父のさゝめまり
何をゝ人されハ移り事

新伯母来姑手ずから茶を出す事乃ち茶物乃様
消所ちらすれも

嫁掃部町長姑を以て
手を出たまおーカ有て

時乃こゝろハ祖父のさゝめまり
何をゝ人されハ移り事

拙作 名獨八吟事に成る所
相俳の之字を言葉に稱あんを

書詩法中意味を言葉に
淋一句成るつゝ生る事

やう成し伏竜の鶏小鉢果り
義伏と意なり伏義と八卦
到に加羅の伏竜を訪り

化さるゝ所に成る法生
一句よりつゝ事

主侍乃月畠平に書
化さる生に稱事

陳者遠ふ并ふ稽塚
天よりつゝ事

残
鶏鳴時 謂を吟に制り

七年〳〵せハ吾まなんで行るらす
あるよあるし

世平出てよく鏡たるかゝ如
あ句の心ゝ人あゝ武士の様
うつゝくあし

五喫〳〵下無都合有〳〵
附合ハ一古ゝれハ結ふまくこと
切ふ三句のこゝろをし

盃屋に結て年蝶ふ緑紅
〳〵あしの俳ハあ句年
ゝゝる変あゝて

日向てハ目梅のする所の梅
緑紅のゝゝるし豊ハ名称
〳〵ちあれハ蝶ふ人乃ゝ細さん
座て付へし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

奉納歌仙　麦林

八乙女を田植ゑ歌や夏の神
明ヶ方の源氏寒し春の雪
糸ゆふの付き合ひ花の明け
酒屋にも赤い家を起しけ
老年は子の乃年傳
手合ひ角力は連さそ
ゆるもの仕物の志ゝ如陽地彩
くりゝ面る志麦乃穂

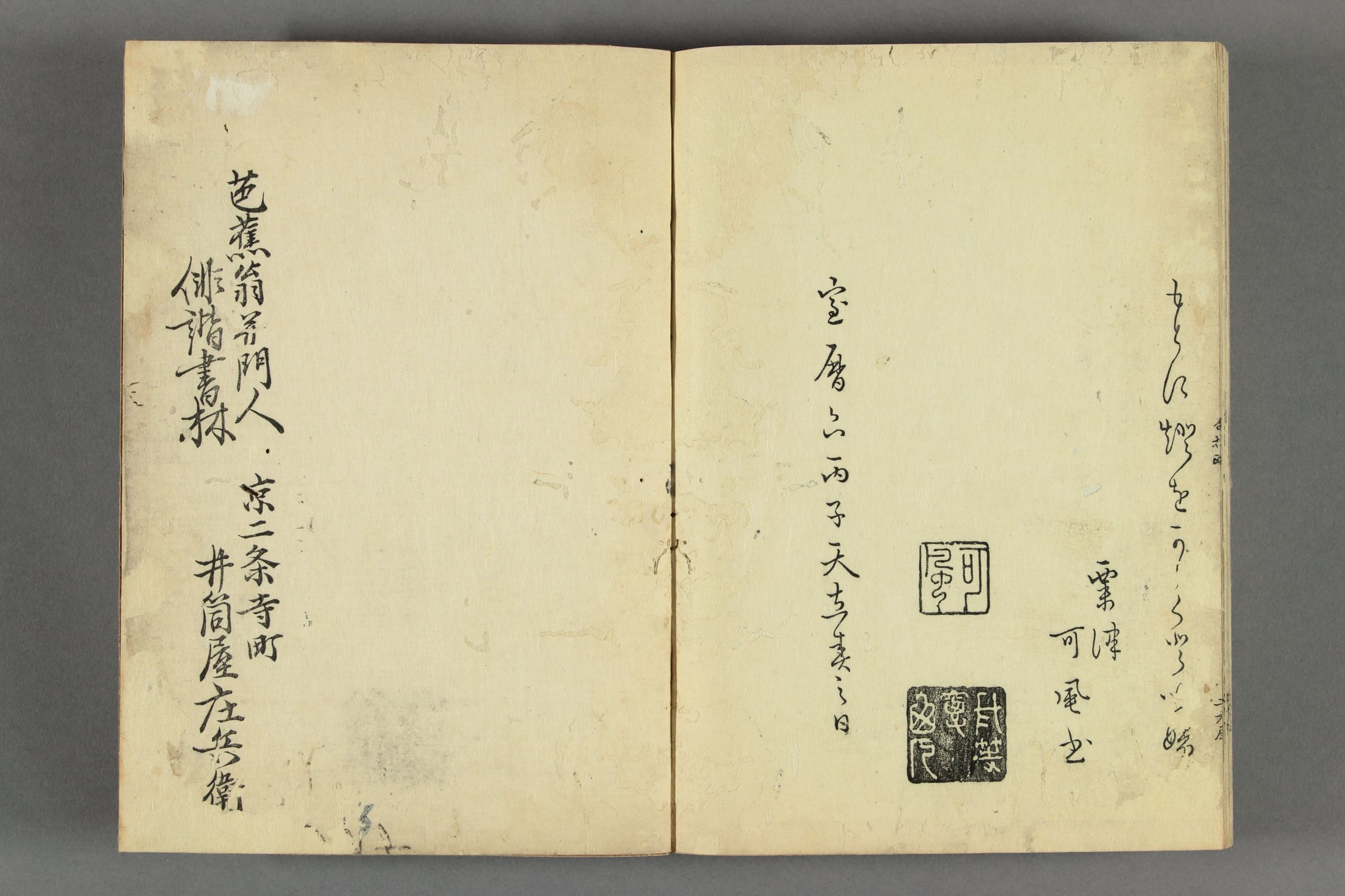
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]千石船の月の[illegible]
[illegible]ウ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

正覺の高味もかくのごとき
なれば世を事とせざるべし
滅後時代あるべくもうら
海和尚撰あるを精み
為に袖をしぼりて
居所の山岳草木巡礼を
初て求法水の麻ほそ
筆を為すべしと雖智
おのづから同じ



芭蕉翁門人　京二条寺町
俳諧書林　井筒屋庄兵衛

宝暦六丙子天春三日

葉清可風出

可屋

武蔵野文庫